

「非常通信セミナー」を開催

中国総合通信局(局長:齊藤一雅)は、中国地方非常通信協議会、中国情報通信懇談会との共催により、5月29日(木)、広島ガーデンパレスホテル(広島市南区)において、「非常通信セミナー」を開催し、約140名の参加がありました。

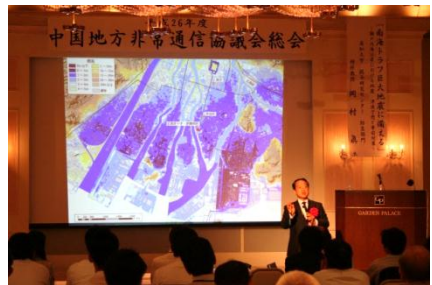
同セミナーでは、南海トラフ巨大地震による津波災害研究の第一人者であり、内閣府の中央防災会議専門委員も務めている高知大学総合研究センター防災部門の岡村 眞 特任教授をお招きし、「南海トラフ巨大地震に備える」と題し、瀬戸内沿岸において、津波災害をどのように想定し、如何に対応するべきかについて、専門的見地からご講演をいただきました。



高知大学 特任教授 岡村 眞 氏



会場の様子



広島市沿岸部の浸水域

岡村先生からは、「当初の想定より震源域が四国山脈の北側まで広がり、瀬戸内と言えども他人事ではない。南海トラフ地震は、東北地方太平洋沖地震と阪神・淡路大震災と一緒に発生するのと同じぐらいの規模になる。沿岸に工業地帯の多い瀬戸内では、津波に加えて火災による災害が心配される。特に、埋め立て地では固い岩盤に比べ4倍の揺れが生じる。1mの津波であっても、瓦礫の塊と化し全てを押し潰す。広島市も岡山市も市の中心部では津波による被害が発生し、さらに津波が川を遡上し被害が広がっていく。正しい知識と適切な判断が生死を分ける。1分以上続く長い揺れでは津波が来るので、迷わず逃げる。揺れが長いほど巨大な津波となる。情報収集・伝達ができる体制の整備と実際に即した訓練が重要であり、子供たちの教育も必要。」など、多くの映像や写真を交えながら、実例と教訓に基づき、説得力のあるお話をいただきました。

聴講者からは、「改めて津波の恐ろしさを認識させられた。地震、津波の認識が変わった。知っているようで知らなかった。職場に持ち帰り周知したい。もっと、詳しく聞きたい。」などの意見が寄せられ、津波に対する備えについて認識を新たにする良い機会となりました。